

新春の一句
初夢は一升餅と
孫の笑み

あきたやまさよし
秋田谷 正好さん



会社勤めを終えた後、頭が鈍らないようにと始めた川柳を北海道新聞の「どうしん川柳」に数多く投稿し、何度も入選している秋田谷正好さんにお話を伺いました。

脳の活性化のために

会社に勤めていた時に、保険会社がやっているサラリーマン川柳を書いてみたことはありましたが、本格的に取り組み始めたのは、平成23年の12月からです。これまでの作品全てを北海道新聞の「どうしん川柳」に投稿しています。もともと新聞を読むのが好きで、川柳にも目を通していました。67歳（平成22年9月）まで会社に勤めていましたが、仕事から離れ字を書くことがなくなると文字を忘れてしまうことが多くなりました。これでは良くないと思い川柳を書いてみようと思いました。

6年間で2,000句以上投稿

誰かに教わったわけではなく、1冊の本を買って独学でやっています。五・七・五という文字の制限があるので、同じ意味でも言葉の使い分けがとても大変で、川柳を書くときには辞書は手放せません。川柳の投稿

を始めたころ、新聞紙面には入選作品が今の倍の12作品が掲載されていて、私の作品が掲載されることも多かったのですが、その勢いに乗ってこれまで続けてきました。これまでの6年間で約2,000以上の句を投稿し、25句くらいが入選し、新聞に掲載されました。週に3~4回投稿していて、1回の投稿で3~6句を書いています。新聞社に聞くと1日500件くらいの投稿があるらしいです。

短歌や俳句ではなく川柳

30代から、健康のためにはじめたジョギングやウォーキングに出て頭をリフレッシュさせると、いい言葉が浮かんでくるんですよ。川柳は言葉の使い分けが大変ですが、俳句や短歌はもっと難しいと感じています。私の母が書き残したいくつかの短歌を短歌集として整理したとき、昔の言葉が多く使われていました。私にはとても真似できないと思いましたし、ダジャレ的な要素も持っている川柳が私には合っ

ていると思います。

家族の団欒と勉強

私が書く川柳は主に家族や孫についてのことが多いですが、近頃は政治ネタも増えています。最近入選した作品は流行語大賞にも選ばれた「付度」を使ったものでした。夫婦でけんかをしてしまった後に、書いた川柳を見せて妻を和ませたり、過去の作品を家族と読んで笑ったりと川柳によって家族のコミュニケーションがとれています。川柳を書くことがとても面白く、勉強にもなりますので、頭が鈍らないように、いつまでも川柳を書き続けようと思っています。

常に笑顔で取材を受けてくれた秋田谷さん。作品を書き留めたノートには、掲載された新聞記事のスクラップもありました。これからは楽しい川柳をたくさん書いてくれることでしょう。

(12月7日取材)